（論　文）

感傷、短歌、パターナリズム

―小川正子の『小島の春』をめぐって―

松　岡　秀　明

キーワード

ハンセン病　感傷　パターナリズム　短歌　小川正子

はじめに

『小島の春』は、国立のハンセン病療養所である長島愛生園に勤務した医師小川正子が、高知県、徳島県、岡山県で長島愛生園への患者の収容やハンセン病についての啓蒙活動を行なった記録をまとめ、1938年に長崎書店から出版された書物である。『小島の春』は、1934年から37年の間に書かれた「土佐の秋」、「再び土佐へ」、「国境の雲」、「淋しき父母」、「小島の春（其の一）」、「小島の春（其の二）」の六つの章よりなる。『小島の春』は、独特のスタイルを持つがそれについては後に述べる。

出版されるとすぐに、『小島の春』は小林秀雄をはじめとする文学者らが絶賛したこともあって話題となり、ベストセラーとなる。中山によれば、「当時の群書を圧して220版、22万冊を数える」売れ行きを示した（中山　1984：83）。この部数は、当時としては異例である。『小島の春』は、監督豊田四郎、脚本八木保太郎で映画化され1940年に公開されると、『映画旬報』1940年度の優秀映画で第１位となった。

『小島の春』は何度も復刊され読み継がれ、1956年には角川文庫にも入っている。最も新しい版は、2009年に長崎出版から刊行された『小島の春―ハンセン病治療に、生涯を捧げたある女医の手記』である。小川を賞賛する著書も、清水（1986）、坂入（2001）などが出版され、瀬戸内晴美編集の全８巻『女の一生　人物近代女性史』の第８巻『人類愛に捧げた生涯』には、阿部光子が小川正子を讃える章を寄せている（阿部　1971）。

一方で、文学、歴史学、人類学といったさまざまな学的領域の研究者は、『小島の春』あるいは／かつ小川正子を批判的に論じてきた。荒井英子（1996）は「『小島の春』現象」という概念を示して、小川正子批判を行なった。「『小島の春』現象」とは、以下のような現象である。1938年に出版された小川正子の『小島の春』がベストセラーとなり、「癩」が伝染病であり隔離が必要であることを説いて患者収容に奔走する小川が「救癩の天使」「白衣の戦士」「救癩の聖医」と賞賛された。一方、隔離を正当化し、社会の偏見を増大し、患者とその家族の人権を奪った（荒井英子1996：79-80）。

まつおか　ひであき：東京大学　教養学部　非常勤講師

荒井英子以降の『小島の春』そして小川正子についての研究は、「『小島の春』現象」を分節化し詳細に検討している。『小島の春』がベストセラーとなった社会的背景として、金井（2000）は、北条民雄の『いのちの初夜』（1936）によって「癩文学」が広く社会で知られるようになっていたことと、佐田稲子をはじめとする女性の作家たち、また豊田正子の『綴方教室』や野澤富美子の『煉瓦女工』等々のおんな・こどもの言説が注目されていたことの二点をあげた。木村（2004）は、この二点に加え、軍需景気と連動した1938年～39年の空前の出版ブームと、日中戦争期における国民間のヒューマニズムへの希求を指摘した。ハンセン病についての社会の偏見を増大させた点については、成田（1990、2001）や木村（2004）が、『小島の春』がハンセン病患者のイメージを固定化したとする。この指摘は重要であり、後に検討する。

一方荒井裕樹（2011）は、『小島の春』というテクストそれ自体に焦点を合わせ、そこで用いられている「病友（ともも）」という言葉の用法の変容を分析した。荒井は、『小島の春』前半では小川との心的交流が芽生えた患者を意味していた「病友」が、後半では「病友」はすなわち患者を意味し、その指示対象が拡大していることを指摘し、血縁的家族とイデオロギー的家族（＝祖国）とは位相の異なる共同体が示されていると論じている。

「小川の〈善意〉の危険性を暴き、その隔離政策への加担を批判すること」に終始すると、「小川正子という存在、または『小島の春』読解の可能性」を断罪へ回収してしまう、と主張する荒井裕樹（2011：193-4）に同意する私は、本稿でなぜ出版当時『小島の春』が多くの読者を獲得したかを、『小島の春』をテクストとして分析することによって検討したい。

1．読者を感動させる力としての感傷

『小島の春』が読者にどのような反応を引き起こしたかを確認することから、『小島の春』をテクストとして分析する作業を始めたい。

『小島の春』の初版を発行した長崎書店は、その「批評感想集」を12頁の小冊子として編み、『小島の春』の付録とした[1]。「感動の手引き」とでも呼びうるようなこの付録には、『小島の春』を読んだ小林秀雄ら23人の讃辞が掲載されているが、それらのなかに、「涙」という単語が何回も現われる。

「涙なくして読むことのできない此の書」と記している者があるが（沖野岩三郎、牧師、作家、小冊子６頁　以下、この小冊子からの引用はアラビア数字で頁数を示す）、『小島の春』を読んで実際に泣いたと述べている者が４人にのぼる。「本など読んでは近来泣かなくなつてゐた筈の私がたうとう涙を出してしましました」（中西清子　東京女子医専細菌学教室、８頁）、「本書を読み乍ら一人で幾度も泣いたり感動したりして全く此の書に引きずられて行つた」（伊藤恭治　牧師　９頁）、「幾度か涙を落としつゝ」（三谷隆正、第一高等学校教授　７頁）。

この小冊子には収められていないが、東大教授の皮膚科医でハンセン病の研究を行なっていた太田正雄も、『小島の春』に感動し涙を流した一人である。太田は、木下杢太郎のペンネームで創作や評論等の文芸活動を精力的に行なっていた人物でもある（以下、太田正雄に統一する）。日記によれば、太田は1939年２月12日甲府へ日帰りの講演に出かけた列車の中で『小島の春』を読んだが（太田　1980：169）、「読み乍ら涙が出て先が読み続けられなくなり、それをまぎらわすため禁煙車と気づかず」煙草を吸ってしまい、車掌に注意されてしまう（阿部他　1939：166）。

なぜ『小島の春』が涙を流させるまで読者の心を捉えたのかを、「感傷」という概念を手掛かりにして考えてみる。後に詳しく見るように、この概念を用いた太田の『小島の春』についての論議には、現在も有効な部分があると考えるからである。

そもそも感傷とはなにか。『広辞苑第六版』は、それを「感じて心をいためること。感じて悲しむこと。感じやすく、すぐ悲しんだり、さびしくなったりする心の傾向」と定義し、『日本国語大辞典第二版』は、「（１）物に感じて心をいためること。また、そのさま、（２）わずかな刺激で感情が動かされる心の傾向。感じやすい心のさま」としている。本稿では、「感傷」を、物事に感じ心を痛めること、すぐ悲しむ心の傾向。また、その気持ち、とする。

太田は、東京日日新聞に発表した『小島の春』の書評（太田：1938）で、小川の患者に対する同情が深いものであることを指摘する。そして、読者の患者に対する同情について、「『小島の春』を手にした人には忽ち油然として不幸の病者に対する同情が湧くだらう」と述べている。

一方、太田は『日本医事新報』1940年８月15日号の「新映画評」に「動画『小島の春』」を寄せた（太田　1940）。松岡弘之（2004）が指摘しているように、この映画〈小島の春〉（以下、映画を〈小島の春〉と表記する）の評では、同情の対象が患者から、治療が無効なことを知りつつ患者に治療を勧める小川正子へと変化している。

すなわち、『小島の春』にかかわる「感傷」には、読者が小川正子に心を痛めることと、読者が小川の描写する患者に心を痛めることの二つがある。以下、それらがどのように生起するかを検討していく。

２.『小島の春』の一節から

『小島の春』で、小川は各地を巡り、講演を行なうとともに患者を診察し彼らに長島愛生園への入園を促すのだが、それを具体的にみるために、「土佐の秋」の第６節「曼珠沙華の花」（小川1938：18 ～ 20　以下、『小島の春』からの引用はページ数だけを示す）に記されているひとつのエピソードを以下に示す。

高知のある山村の中心部から巡査（なぜ警察がかかわっているのかは、第５節でふれる）と二人で患者宅まで徒歩でたどり着いた小川は、そこからさらに反対の渓を超え「ずつとずつと奥の一里余も行つたところの山の中」に、もう一人患者がいることを知る。小川は、「雨で女の足で到底行けまい」と忠告する巡査を説得し、二人で「話をしてたらすべり落ちさうな山道、疲れてしまひ相な登り道」を歩く。この記述の後に、「土佐の国半山の村の山深み雨降りつぐに濡れつつぞ行く」、「檜の香しるけき山の秋雨に曼珠沙華赤く咲き濡れて居り」という二首の短歌が載せられている。

小川と巡査は一時間歩き、山中の一家三人全員が患者の住む家にたどり着く。小川は五十五歳の母親、三十歳くらいの男、その妹を診察し、母親の左手足に「知覚麻痺」、男に「少しも治療して無い結節のうづ高い顔」、外観の異常はない妹に「神経の肥厚」を認める。療養所に行こうとは夢にも思わぬと言う彼等としばらく話をして、小川は退出し「顧みる人とてもない」彼らの「運命をあれこれと想ひつつ」山峡の道を村の小学校へと向かう。その後に、再び短歌一首「秋風の音なく降れる山峡を帰る心は泣き居たりけり」が現われる（20 ～ 21）。

村の小学校へ着いた小川は、そこに待っていた警察署長や長島愛生園から同道していた看護長と落ちあい、村の集まりで講演し、愛生園のニュースやハンセン病を扱ったと思われる映画〈夢に見る母〉を上映する[2]。その後宿に着くと、内儀から次のような話を聞く。先の家族三人が患者の家の妹が羊歯を売りに来るが、買った羊歯の束は家の中に入れない。また、家の子をあやしてくれるが、決して近づけないようにしている、と。そして小川は、この節を次のように結ぶ。

> 病んで家に在る人は知らずとも、その人を養はうとして苦しむ母や妹は、斯うして眼に見え又見えぬ迫害と隔てとを受けなけねばならぬ（22）。

金井は、『小島の春』を「上司への報告書と抒情的な歌文集というまったく相反する要素を内包

する不思議なテクスト」と捉えている（金井　2000：104）。たしかに、このテクストは、医学用語を用いた患者の記述やハンセン病についての講演についての報告書であり、美しい風景を讃える紀行文であり、患者についての印象や小川自身の感情を記した日記でもある。そして、全編を通して小川が詠んだ短歌が鏤められている。短歌は叙景歌もあれば叙情歌もあり、たとえば前者は紀行文のなかに、後者は患者宅に赴き診察をする場面に現われる。

この構成が、『小島の春』を、医師である小川、気丈な小川、涙もろい小川といった小川正子という一人の人間のいくつかの側面が現われている多声的で魅力的なテキストにしているのである。

3．感傷Ⅰ：読者が小川正子に心を痛めること

小川に対して読者が心を痛めることから検討してみよう。上に見たように小川は高知の山奥や瀬戸内海の小島で患者を訪れ、あるいは新たな患者を見つけ出し、診察をして彼らに長島愛生園への入所を促す。また、講演会という啓蒙活動を行なうことで、ハンセン病は遺伝病ではなく伝染病であるという「正しい知識」の普及を図る。こうした小川の精力的な活動の様子は、読者の心を動かす大きな力となっている。

まず、触診から見ていきたい。『小島の春』には、小川がハンセン病患者や感染が疑われる者に触診をする場面がたびたび現われる。触診のクライマックスのひとつは、次のような場面である。高知から長島療養所へ小川とともにやって来た患者たちが療養所で最初の朝を迎えた日の記述が「いのちの初夜明けて」という題で、「再び土佐へ」の第七節となっている。

> 手を取つて神経の肥厚を診て居ると結節の一杯にあるその女の人が泣き出してしまつた。「先生そんなに私達に触つて汚いとは思はないんですか」と泣きじやくる（87）。

患者の身体に素手で触れるという行為は、医師としては診察上通常の行為である。しかし、「汚い」とされている患者に対する小川の触診、そしてそれに感動して泣く自らを「汚い」と思っている患者に、読者は心を痛めたと考えられる。

しかし、この場面は長島愛生園という医療機関における触診であり、『小島の春』の触診場面としてはむしろ例外である。『小島の春』で、小川が触診を行なうのは医療機関ではなく患者の家なのである。例をひとつ引く。

> 山から二十年来同居して居ると云ふ五十歳位の男の人が戻つて来た、「俺は何でもない」といふのを裸にして診ると左手が曲がつて前膊半分に知覚がない（23）。

この時、小川には地元の警察署長が同行しているとはいえ、女性の医師がハンセン病の患者宅に赴いて診察を受けようとしない男を裸にして触診するという場面は、読者に強い印象を与えたであろう。小川の情熱は、高知へ向かう車中でみる夢のなかでも患者を発見しようとさえする。

> 成程子供を抱へた三十位の女の手の甲から袖口にかくれて白い斑紋が大きい。何だらう。癩性のものぢやあるまいか、「針で突いてみたいなあ」と想ふと初めて旅の夢が醒めて緊張する（5）[3]。

4　もう一つエピソードも小川の卓越した行動力を示している。高知の山奥でバスが運休したため、小川が材木屋の青年が漕ぐ自転車の荷台に乗せてもらい、自転車で伴走する巡査とともに三人で三里の道のりを行くくだりで、「土佐の秋」第十二節「夕月の峡」（42 ～ 45）に記されている。目的地の別の山村まで小川は青年とハンセン病についていろいろと話をして、夜になってからようやく目的の村に着き宿に落ち着く。

当時の女性としては型破りな行動力は、小川の熱心さを読者に訴えかける。愛生園の小川の上司で、小川に検診行の記録を書くことを命じた光田健輔も、『小島の春』に寄せた序文のなかでこれ

らのエピソードを次のように紹介している。

土佐の癩を尋ねては短時間の間に自転車の後ろに乗せてもらひ、危険なる山坂を跋渉する等、顔を見ればやさしい女性であるが、やる事はやむにやまれぬ男まさりである（序　８～９）。

こうした小川の懸命さが、読者に感銘を与えたのだと考えられる。

『小島の春』では、短歌が重要な役割を果たしている。叙景歌がハンセン病患者を訪れる旅という重苦しい内容と読者との間の緩衝材となったり、叙情歌が読者の同情を誘ったりするのである。つまり短歌は、時には散文の力を緩和し、時には散文を補完するように作用している。

短歌が散文と相互補完的に小川の懸命な仕事ぶりを示している例を、二つあげる。まず、上に見た自転車の荷台に乗って三里の道のりを来たことに小川は感動したのか、この節の終りに短歌八首をまとめて載せている。その二首を引く（45）。

灯をつけぬ自転車二つ夕月の光りひそけき田野野の峡行く

自転車上に語りつ越えし土佐の国の夕月の夜を我忘れめや

短歌によって、小川の感動とその懸命さが読者に伝えられるような構造となっている。

一方、第２節で紹介した「曼珠沙華の花」には短歌が三首入っている。はじめの二首は、小川と巡査が山の奥へと進んで行く場面に挿入されている（20）。

土佐の国半山の村の山深み雨降りつぐに濡れつつぞ行く

檜の香しるけき山の秋雨に曼珠沙華赤く咲き濡れて居り

短歌だけ読めば、二首ともごく一般的な叙景歌である。しかし、読者は小川正子というハンセン病療養施設の医師が巡査とともに山に分け入って患者宅に向かっているというコンテクストを了解しているために、小川の尽力がより印象深く浮き彫りにされるという仕組みになっている。

三首めは、小川が患者三人が住む山中の家から帰り道を詠んだものである。以下、短歌の前に置かれている文とともにその短歌を再び示す。

顧り見る人とても無い母、妹三人の運命をあれこれと想ひつつ帰つてくる山峡の道。

秋風の音なく降れる山峡を帰る心は泣き居たりけり（21）

この一連は次節の「感傷Ⅱ：読者が患者に心を痛めること」にもかかわってくるのだが、まず読者の小川に対して心を痛めるという点に注目すれば、この歌に詠まれている患者たちに同情し心で泣く小川に対して、読者は心を動かされるのである。

４．感傷Ⅱ：読者が患者に心を痛めること

本節では、『小島の春』の読者が患者たちに対して心を痛めることがどのように生起するのかを検討する。「土佐の秋」第三節「丹波山」（９～10）は、小川がある山の患者宅を訪れる場面から始まる。最初居留守を使っていた老人の患者は、同じ地域から愛生園に入所した人たちの安否を気遣う。そして、「日に日に狭められる世間を思ひ、療養所に行かねばならぬ、行き度い、と思ひつゝも家の始末、健康な家族の処置や行末」を案じ、行きそこなっていると語る。この患者に対して、小川は「安住する人達の無理からぬ嘆きであり、愛着であらう」と同情のコメントを記し、老いた患者に対する読者の同情を誘うのである。

『小島の春』に何度か現われる愛生園へと向かう患者たちと家族や近隣の者たちとの別れの場面は、読者の患者たちへのさらなる同情を引き出す。そして、そのような場面に添えられた短歌は、読者の患者に対する心痛を増幅するという点で重要な役割を果たしている。『小島の春』には、小川が患者を憐れむ場面が数多く現われる。1947年にハンセン病の療養施設である香川県の大島青松園に入った島比呂志は、小川の次のような短歌（49）を読み、「涙腺を満開」にしてしまったと

記している（島　1991：12）

これやこの夫と妻子の一生の別れかと想へば我も泣かるる
親と子が泣き別れつる峠路は秋さかりなる花野なりけり
夫と妻が親とその子が生き別る悲しき病世になからしめ

この三首は「土佐の秋」の第十三節「秋風の曲」に収められている。この節には、山奥の村からトラックで高知市に向かう三十里ほどの行程の何カ所かで待ち受ける患者を乗せていくエピソードが記されているが、上の三首は長島愛生園へ入る父親が子供と別れるシーンの後に現われることによって親子の別れの哀れさを強調しており、その効果は島を泣かせるほどだったのである。

もうひとつ例をみてみよう。小川は、高の山の中の村で30歳台の男性の患者宅を訪れる（「土佐の秋」第八節「土佐の山中」26～29）。小川はそこで、患者の兄の妻とその11歳になる娘も感染していること、さらに7歳の息子も感染の可能性があることを発見し、「此の家には総てが『手遅れ（ツーレート）』であつた」と悔やむのだが、「然しもつと遅過ぎるより遅いことはない」とハンセン病が伝染病であるという事実を知らせる啓蒙活動を推進しなければならないと述べる。この節の終わりには次の三首が載っている。

その母も児も亦病むと吾は診たり診つつ嘆かふかく来つること
病む人を持てる家族の状況（さま）見むと此の山中に来は来つれども
津野の山杉の木立のかげ深きほとりに嘆く母と子を憶ふ

5．ハンセン病と公的な力

1931年8月31日、1907年施行の「癩予防ニ関スル件」が廃止され「癩予防法」が施行された。なぜ、ハンセン病にかかわる法が改正されたのだろうか[4]。1936年2月21日、衆議院本会議で内務政務次官斎藤隆夫が「国家ノ体面上ヨリ、本病予防ノ徹底ヲ期ス」と述べているように[5]、日本の国家としての体面を向上させることが目的であった。

「癩予防ニ関スル件」とは異なり、「癩予防法」は在宅患者も強制隔離の対象とした。だからといってすべての在宅患者が強制的に隔離された訳ではないが、そうすることが法的には可能となったのである。内務省は「癩予防法」の前後の1927年と1936年に全国癩患者一斉調査を行ない、その結果をそれぞれ『癩患者ニ関スル統計』というタイトルで出版しており（内務省衛生局　1927、1936）、内務省衛生局と警察は患者の所在を把握していた。

1931年に設立された財団法人癩予防協会が出版した『昭和十一年度　癩患家の指導』と『昭和十二年度　癩患家の指導』の2冊には、全国の府県で実施されたハンセン病患者がいる家庭に対する行政の指導状況が記されている[6]。たとえば新潟県では、1936年6月20日から30日までを「患家指導期間」とし県庁の防疫監吏、衛生主事補、警察官8名が各市郡部に派遣され、「所轄の警察署と協力の上」さまざまな指導を行なっている。また、県内で最も患者の多い三か所で映画、講演会を開催し、2,600名が集まったと記されている（癩予防協会　1937：29）。患者に対する指導も、新潟県では警察官が私服で訪れ（癩予防協会　1937：29）、長野県では巡査が極秘裡に行くなど（癩予防協会1937：60）、警官がどのような役割を果たしたかには県によってまちまちだが、警察官が動員されたのは確かな事実である。

小川が高知や岡山で患者宅を訪れていた時期には、行政と警察はハンセン病の患者の所在を詳細に把握していた。すなわち、小川のハンセン病患者、あるいは感染が疑われる者の家々への訪問はこうした監視の網の目に依拠していたのである。そして、例外を除いて小川は公的な権力を体現する官吏や警官を伴っており、そのことは『小島の春』ここかしこに記されている。

6．感傷、短歌、パターナリズム

『小島の春』から、先に見た癩予防法が制定された意図を読み取ることは全くできない。また、公権力がハンセン病とかかわっていたことは当然のこととして記されている。小川は、患者のためを思い懸命に働く医師として自らを描き、例外を除いて官吏や警官は小川を手助けする善良な者として登場するのである[7]。そして、成田が指摘しているように小川は自らの心のゆれを隠そうとしない[8]。そうした際に、すでに引いた叙情歌―再び下に示す―が現われて、ハンセン病の患者に対して悲しむ小川を浮き立たせる。

これやこの夫と妻子の一生の別れかと想へば我も泣かるる
その母も児も亦病むと吾は診たり診つつ嘆かふかく来つること
病む人を持てる家族の状況見むと此の山中に来は来つれども

では、患者はどのように表象されているのか。金井は、『小島の春』をベストセラーとしたテクストに内在する要因の一つとして、「超時代的な文学性」に注目する（金井　2000：106）。金井は、「超時代的な文学性」が何かを説明していないが、固有名詞を失った患者と医師である小川正子の出会いが繰り返されることで、「目を覆いたくなるような過酷な現実ではありながら、どこか歴史を超越したできごととして認識させる」と考えているように思われる（金井　2000：104）。もしそうだとすれば、小川は彼らを一方的な憐みの対象とし、病者のイメージを固定化してしまう、という成田の指摘とかかわってくる（成田　1990、2001）。

小川は、彼らを記述する際に人格を捨象し可哀想で哀れむべき存在というハンセン病患者のステレオタイプを巧みな構成で作りあげた。法哲学者のドゥオーキンは、パターナリズムを、ある人間の幸福のためにその個人の行動の自由に介入することであるとしている（Dworkin　1972）。病む者と癒す者の間にはしばしばこのパターナリズムが入り込むが、『小島の春』の小川の行為はまさにこのパターナリズムに裏打ちされている。小川は、患者にとってよいことだと確信して療養所への入所を勧める。そして、読者に小川の行為が正しいと信じさせるのは、ハンセン病の患者が可哀想で憐れむべき存在であるいうメッセージが『小島の春』のここかしこに散りばめられているからである。

成田は、小川とハンセン病を病む者の関係に注目し、小川は「操作可能な『患者』の姿しか見ていない」と批判する（成田　2001：201）。『小島の春』は、地名は明記されている場合が多い。しかし、成田が指摘しているようにハンセン病患者のほとんどは氏名が記されていない。患者のプライバシーに配慮したのだろうが、この事実は象徴的である。患者を匿名とすることは、患者の抽象化につながる。医療における専門家支配について論じた書のなかで、医療社会学者のフリードソンは、「患者の非人格化（*depersonalization*）が最も顕著に認められるのは、患者が最も無力で、医療のサービスを選択し組み合わせる権利が管理者のみ認められている場合である」と論じているが（Freidson　1970：170）、このことは日本のハンセン病患者にあてはまる。

小川は、彼らを記述する際に人格を捨象し可哀想で哀れむべき存在というハンセン病患者のステレオタイプと、彼らのために懸命に働く女性医師のイメージを巧みな構成で作りあげ、それを読者に提供することによって感傷を生起させた。

第1節で紹介した映画〈小島の春〉評で、太田はハンセン病が不治と考えられていることによって、「患者の間にも、それを看護する医師の間にも、それを管理する有司の間にも感傷主義が溢れ漲っている」と当時の認識を批判している。映画を高く評価するにもかかわらず、太田は〈小島の春〉が「徹頭徹尾あきらめの動画」であるとし、「『小島の春』及び其動画は此の感傷主義が世に貽つた最上の芸術である」とアイロニカルに語るのである（太田　1940：58）。この『小島の春』評は、今日でも的確だと思われる。

大西巨人は、1957年に発表した「ハンセン氏病問題―その現実、その文学との関係」（1957a、b）で、上の太田の「『小島の春』及び其動画は此感傷主義が世に貽つた最上の芸術である」という主張を援用し、「思えば太田の云う『感傷主義』ほど、その名の優美にして、その実の残酷なるはない」とする（大西　1957a：104）。大西は、「感傷主義」が、患者をステレオタイプのイメージのなかへと囲い込んでしまうという意味で残酷であると捉えていると思われる。

「昭和十年代から社会事業に関係していた」という吉田久一は、次のように書いている。

> 『小島の春』は私が青年期に愛読したレプラ医師の実践記録であるが、現在の学生諸君がちょっと想像できないほど、われわれ社会事業を志す学生に影響を与えたものである。今でも小川さんの「おもえ人はなれ小島の山影に、癩女がひとりする雛祭りを」を暗誦している（吉田1980：75）。

この吉田のコメントを読んだ池田（2010）は、『小島の春』に魅了された時に読者は「ヒューマニズムという衣を纏ったパターナリズム」という罠に陥っていたと論じている（池田　2010：205）。この罠には、感傷がかかわっている。そしてそれは、太田（1938）が「天稟と文体と倶に備わつた女詩人」と賞賛する小川ゆえになしえた感傷の罠なのである。

引用文献（アルファベット順）

阿部光子

1971　「小川正子」瀬戸内晴美編『女の一生　人物近代女性史　第８巻　人類愛に捧げた生涯』pp.139-174、東京：講談社

阿部知二、小林秀雄、太田正雄、下村宏、本田一杉、高野六郎、内田守（座談会）

1939　「癩文芸を語る」『改造』21（７）：160-169

Dworkin, Gerald

1972　“Paternalism.” *Monist* 56: 64-84

Freidson, Eliot

1970　*Professional Dominance.* Chicago: Aldine

藤野豊

1993　『日本ファシズムと医療』東京：岩波書店

池田光穂

2010　『看護人類学入門』東京：文化書房博文社

金井景子

2000　「『いのちの初夜』と『小島の春』―― 昭和10年代のジェンダー編成と文学・序説」『昭和文学研究』第41集：100-111

木村功

2004　「楽土／ディストピアの言説空間――小川正子「小島の春」におけるハンセン病の言語表象」『昭和文学研究』第49集：55-69

内務省衛生局

1927　『癩患者ニ関スル統計』東京：内務省厚生局

1936　『癩患者ニ関スル統計』東京：内務省厚生局

成田龍一

1990　「『小島の春』のまなざし」『日本近代思想大系22　差別の諸相』付録月報15、東京：岩波書店

8

2001 『〈歴史〉はいかに語られるか』東京：NHK出版
中山良馬
1984 「『小島の春』出版の頃」西坂保治、河本哲夫、秋山憲兄（編）『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社、pp.83-85
日弁連法務研究財団ハンセン病に関する検証会議（編）
2007 『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書　上巻』東京：明石書店
小川正子
1938 『小島の春』（特装版）東京：長崎書店
大西巨人
1957a 「ハンセン氏病問題」『新日本文学』12（7）：pp.94-105
1957b 「ハンセン氏病問題」『新日本文学』12（8）：pp.134-142
太田正雄（木下杢太郎）
1939 「小川正子著『小島の春』」『東京日日新聞』３月20日号
1940 「動画『小島の春』」『日本医事新報』第935号（８月10日発行）：pp.57-58
1980 『木下杢太郎日記　第４』岩波書店
坂入美智子
2001 『潮鳴りが聞える：私の小川正子』東京：不識書院
島比呂志
1991 『らい予防法の改正を』東京：岩波書店
清水威
1986 『小川正子と小島の春』東京：長崎出版
吉田久一
1980 「太平洋戦争下の医療政策」内田守・岡本民雄編『医療福祉の研究』、pp.49 ～ 76、京都：ミネルヴァ書房

註

1 架蔵の『小島の春』は、1938年11月20日発行の特装版500部のうちの一部だが、「批評感想集」が入っている。「批評感想集」は小林秀雄が東京新聞1939年１月10日に発表した『小島の春』の論評を載せているので、この「批評感想集」は後から挿入されたものである。

2 青山三郎（1903 ～ 81）が監督した1934年公開の日活映画と思われるが、詳細は現時点で不明であり、今後調査したい。

3 「針で突く」のは、ハンセン病で出現する痛覚の異常を調べるための神経学的検査である。

4 癩予防法については、藤野　1993、pp.86 ～ 93を参照のこと。

5 日弁連法務研究財団ハンセン病に関する検証会議　2007、p.112による。

6 癩予防協会については、藤野　1993、pp.93 ～ 100を参照のこと。

7 例外のひとつとして、「国境の雲」第六節「梢火」（120 ～ 127）に、患者宅を訪れた巡査が入所をしぶる家族に「強制収容」をちらつかせる場面が記されている。

8 成田は、小川が「病者への想いや、ためらいなど内面の動きを率直に綴って」いると評している（成田　1990：5～6）。

（受理　平成28年９月12日）